

## 幸せを実現するために

三重県 大台町立大台中学校 2年  
尾上 恵里佳 (おのうえ えりか)

「恵里佳，空はこんなに広いんですよ。境目なんか無い。大きくなったら，いろんな世界を見ておいで。」

祖父は，私を抱き上げると，いつもこのように語りかけていたそうだ。母方の祖父は，二〇〇六年十月三十一日，胆管癌によって他界した。私が三歳の頃である。だから，祖父との明確な思い出はほとんどない。しかし，目を閉じると，日焼けしたしわだらけの顔で嬉しそうに笑う祖父の表情がぼんやりと浮かんでくる。きっと，この表情で私に，あの言葉をかけてくれていたにちがいない。

もうひとつ浮かんでくるのは，祖父の遺体の前で涙を流していた叔父の姿である。叔父は，私の母の義弟である。日頃，あまり感情を出さない叔父が握りこぶしをつくって泣いているのを見たのが，幼い私にとって衝撃的だったのか，私の脳裏に映像のように残っている。確かに，愛する人と永遠に別れることは，身が引き裂かれそうな程，辛いものだ。自分が成長するにつれ，叔父の涙には計り知れない深い思いがあったのではないかと，それは叔父の右手に関することではないだろうかと思いつくようになった。中学生になり，母に進路の相談をしているとき，「自分がどう生きたいか，どう生きたら幸せか」という話になった。その時，叔父と叔母が幸せを築いてきた話を母から聞いた。全てを知った時，祖父への敬愛の気持ちと叔父や叔母の強い覚悟を私は想像した。

叔父は，二十代の頃，仕事中に取り扱っていた鉄材が右手に落ちてきたそうだ。そして，右手を失った。叔母とはその後，出会った。叔母は大学生で，アルバイトをしていた店に叔父がいた。二人は互いに惹かれ合い，結婚を考えるようになった。しかし，叔母には，不安に思うことがあった。家族は，祝福してくれるだろうか。娘の将来の姿を色々思い描く両親を見て，自分の考える幸せとの隔たりを大きく感じていたからだ。祝福してもらえなくても結婚はしたい。しかし，祝福してくれたらより嬉しい。躊躇っているうちに時間が過ぎていった。そんな時，曾祖母の余命が僅かであることが分かり，意を決して叔父は結婚の許しを得るために祖父母のもとを訪れた。自分の右手が義手であること，高校に馴染めず退学してしまったことなど，自分の生い立ちを正直に話した。祖母は受け止め切れなかったのか，話の途中で部屋を退出してしまった。最後まで頷きながら静かに話を聞いた祖父は，

「これからよろしく頼みます。家族として，何でも遠慮なく言ってください。」

と伝えたい。その声を聞いて、祖母は再び部屋に戻ってきた。そして、  
「私は認めません。期待して大学で勉強させてきたのに。これでは幸せになれません。」

と言い放った。祖父は間髪入れずに、  
「何も言うな。これからは、家族や。」

と返して、祖母を部屋から出した。その後、祖母方の親戚の反対も祖父が全て対応した。こんなに強い祖父の姿は、初めてだったと後になって祖母が言っていた。家庭では温厚な祖父。祖母に厳しいことを言われても、文句一つ言うことなく従う祖父。そのような祖父が、初めて祖母に毅然とした態度で気持ちを伝えた。それは、二人の幸せを願う上での行動だったに違いない。叔父が正直に自分の全てを語り、心の底から結婚を望む気持ちが祖父に伝わったのだろう。祖父は、結婚式を挙げてはどうかと言った。しかし、二人は、それを断った。祖母が受け入れてくれているようには、感じられなかったからだろう。それから一年半後、曾祖母に続くように祖父は他界した。癌の末期には強烈な痛みを感じていただろうに一言も痛い、辛いとは言わなかった。最期は、自分で救急車を呼んでほしいと頼み、病院に着くと間もなく息を引き取った。遺体として自宅に帰ってからも、叔父はずっと正座をしたまま祖父の傍にいた。三歳の私が目にしたのは、その姿だったのだ。叔父は葬儀の時左手に右手を添えて棺を担いでいた。

あれから、十一年の月日が流れた。祖父の月命日には、叔父と叔母は必ず墓前に花を供えている。子どもが生まれて家族が増え、今では四人で供えている。その花は、

「ありがとうございます。」

と、祖父に語りかけているようである。そこには、時が経っても変わらない気持ちがある。

それとは逆に、時の経過が人の気持ちを変えることもある。孫に囲まれた祖母はとても幸せそうである。孫の顔が見たいあまり、叔父や叔母が来るのを心待ちにするようになっている。祖父が望んだ差別や偏見という境目のない世界こそ、祖母や叔父、叔母の家族を幸せにしてくれたのだと思う。空をぐっと見上げて、私は祖父に誓う。

「おじいちゃん、次は私が境目のない世界をつくるよ。強く優しい気持ちで、必要なことを必要な時に伝えられる人になるよ。」